



気になるあいつ

わかぎるふ

双葉社

歓迎

大阪の中央区に森之宮というところがある。大阪城に行く最寄の駅でうちの近所だ。普通の駅なのだが、なんせ大阪城の敷地面積が広いので人口密度が低い。半分が普通の町で、あとの半分は大阪城公園の森という感じである。

そんな森之宮の駅の裏の路地にビシッと居酒屋が並んでいる。いずれも小さな昔からある飲み屋ばかりで、安くて旨いのが店のモットーだ。どこの下町にもあるありふれた光景である。夕方ともなるとサラリーマンで賑わう。

うちの旦那のよく行く串カツ屋も、時間になればスーツを着たおっさん連中がズラリと並ぶ。いずれも晩メシ前の一杯。串カツをバクバクとメシ代わりに食ってるような人は誰もいない。というか、女がいない！みんなビール片手に「今日の会議はあかんぞ」とか「俺は言うたったんや！」というような話に華がさいている。

そんな店ばかりなので、たまに私が旦那と行ったらそれだけで、「おお、女が来たぞい」という目で見られる。普段はあんまり女扱いされたことがないから、奇妙な感じにもなったりする。一度「すいません、焼酎下さい！」と言ったが、店の人に聞えてない時があった。すると店中のサラリーマンのおっさんが「おーい、あそこのお姉ちゃんが焼酎って言ってるぞ」と頼んでくれた。「マドンナ気分やわあ」と内心喜んだもんだ。

ま、そんなことはいいとして…今回の気になる写真はそんな居酒屋裏通りにある一軒の店だ。いや、正確には一軒の店の壁だ。店は「一力」

という名前である。：普通の居酒屋だが、団体さん用に別室がある。

で、その壁に歓迎と直接書かれている。：団体は分るのだが、なんとそれと上下して「劇団」と書いてあるのだ！ 劇団：ただでさえ人口密度の低い土地なのに、サラリーマンしかこないのに：劇団って？ なんやそれ、どっからきたんや！ と言いたくなるではないか。

実は森之宮にはプラネットホールといういわゆる市民ホールのようなものがあり、確かに劇団関係者が来ることは来るのだが：ものすごい細い裏通りにまで来るのだろうか？ ましてサラリーマン相手の店なんて夜の11時くらいで終わるのが常だ。夜中まで飲みたがる劇団を歓迎していいのだろうか？

いやいや、今の若い劇団の子達は1時間くらいでさつと飲んで帰るのではないのだろうか？ ちよつと待てよ、じゃあこの書き込みを見て飛び込んだ劇団の面々が、すぐにラストオーダーですなんて言われて切れないのだろうか？ いや、最近の若い劇団の子達は文句とか言わない

のかもしれない…と、私の頭の中はもう想像でグルグルと場面転換中だ。
うーっ！ 気になる店を発見してしまった。是非とも今度うちの劇団員と行こうと思っている。そして実際に別の劇団の人たちが利用しているのか知りたいものだ。

ともかく劇団と名が付くと煙たがられるのに、歓迎と書いてあるのだから、一度は行かなくてはという心境だ！

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
